

レイテ決戦と小磯内閣

平成17年3月24日 鎌ヶ谷中央公民館

戦争中、二年九か月にわたって君臨してきた東条英機内閣が総辞職したのは、昭和十九年七月十八日でした。絶対国防圏の要衝、この線だけは絶対に守るとしてきたサイパン島の陥落が引き金となったのですが、二十二日には朝鮮総督の予備役陸軍大将小磯内閣が成立しました。人権派弁護士として活躍した正木ひろしは日記に、「新内閣の出現は、神が日本を見捨てなかつた証拠である。夜が白み始めた。説教〇〇が去つた朝の、すがすがしい空気を感ずる」と書いています。説教〇〇と云うのは昭和の初め、東京都下で強盗に押し入っては家人を縛り上げ、身動き出来ないようにしておいてから、あれこれ人生や防犯の説教をした「説教強盗」のことですが、それを戦局も国民生活も悪化の一途をたどっている時だと云うのに、「必勝の信念」一点張り、説教好きの東条にたとえたのです。

「嗚呼遂に、東条内閣は倒れたり。日本国民の中に宿れる聡明は、遂にわが国始まつて以来の愚劣なる内閣を倒したり。官庁の空気は明るくなり、知れる者は皆、慶び合いたり」。こう書いたのは、近衛文麿元首相の秘書官をした細川護貞さんです。国民の力を評価していますが、憲兵、特高警察の嚴重な監視下、うっかり口もきけない戦争中のことです。実際は重臣の世論、「一日も早く戦争終結の道を考えなければダメだ」と、元首相の岡田啓介が近衛や平沼騏一郎、若槻礼次郎ら重臣を倒閣に結束させた結果でした。ところが小磯内閣の八か月半は、徳川夢声が日記に「東条内閣が総辞職したこと、私には感情的に会心のことだまことに目出たい。しかし、あとが小磯内閣とはなんだか気がぬけた」。こう書いているように、「木炭自動車内閣」と陰口されるほどの「スローモー内閣」。終戦にはまだ一年余りもかかってしまうのです。

なぜ、東条内閣の後に終戦内閣が出来なかつたのか。当時の日本の国力、戦力は、参謀本部戦争指導班が「既に破弾界に達している」、弾丸が破裂する寸前と結論づけるほど、絶望的なものでした。十九年の生産見込みは、飛行機が計画五万二千機に対して約三万機、鋼材は四百五十万トに対して二百五十万トから三百万ト、南方からの燃料輸送も三百万キリットル以上の予定が半分です。しかも、この生産見込みが達成されたとしても、参謀本部の「機密戦争日誌」によると「航空揮発油、普通揮発油、共に十二月迄なり。消費規制その他の措置に依り、三月迄維持出来るかどうか」。こんなお寒い状況なのです。兵器の生産も逼迫し、いくらか兵隊を召集しても、武器を持たない軍隊の出現さえ予測されていました。

八月二日の閣議で、各閣僚に「國務大臣としての意見を率直に述べてほしい」と要望したのは軍需大臣の藤原銀次郎です。藤原自身、船舶、石炭の状態が極端に悪いことを説明しましたが、外務大臣に留任した重光葵が「こうした状態を、なぜ早く我々に伝えなかったのか」。こうなじるほど、東条時代は閣僚にさえ、よその省のことは知らせない、その秘密主義はひどいものだったのです。続いて農商大臣の島田俊雄が食糧事情の緊迫を訴え「長く細く行くか、太く短く行くか」。その何れかだとして、「食糧配給を一日三合にして、三か月間配給することを考えている」と発言すると、閣議は沈痛な空気に包まれたと云います。

日本が頼みにしていたドイツも、ヨーロッパ戦線、独ソ戦線で敗退が続いていました。七月二十日にはヒトラー総統の暗殺未遂事件が起こり、戦争指導班長の種村佐孝大佐は「大本営機密日誌」に、「ドイツを見放す」と書いています。「ドイツ内部の士気崩壊を現わすものであり、この事件を契機に我々としては、ドイツ頼れずとの判断であった。一年前には、ムッソリーニ政権崩壊後イタリヤは降伏し、いままたドイツは虫の息になりつつある。三国枢軸はここにくくずれんとし、日本は独力で戦争遂行を覚悟せねばならぬ段階になった」。その種村が参謀本部参謀の三笠宮少佐に会議決定の要旨を説明に行ったところ、聞き終わった三笠宮は、種村が持つて行った書類の裏に鉛筆で「帝国は速やかに大東亜戦争を終熄せしむ」。こう書いて「この方針では如何ですか」と問いかけたと云うのです。

ここまでわかっていながら、小磯内閣はなぜ終戦内閣ではなかったのか。終戦への努力の第一歩が、まず戦争を始めた政権を倒すことにある。この岡田たち重臣の考えは、確かに東条内閣総辞職で達成されました。しかしそれから先の道程は、それまで以上に険しいものだったのです。外務省は敗戦後の二十六年四月、「日本外交の過誤」と題する五十頁ほどの文書を纏めています。当時の吉田茂首相が、サンフランシスコ講和条約締結を目前に控え、政務局政務課長を呼んで「日本外交は、満州事変、支那事変、第二次世界大戦と云うように幾多の失敗を重ねてきたが、今こそこのような失敗の掘つてきたところを調べ、後世の参考に供すべきものと思う。君たち若い課長の間で研究を行い、その結果を報告して貰いたい」。こう云う指示で作成された文書ですが、「実際問題として、二十年三月頃までは終戦工作を行い得るような国内状況ではなかった」としています。

第一に、「無条件降伏」へのアレルギーが強かったことです。十八年一月にカサブランカで米英首脳会談が行なわれた際、ルーズベルト大統領は日独伊三国に対する「無条件降伏」の要求を全世界に発表していました。しかもそれは、同年十一月の米英ソ三首脳のテヘラン会談でも再確認されましたから、もはや動かしがたい連合側終戦条件と見なされたのです。サイパンを取られ日本全土がB29の空襲にさらされることになっても、南方資源の輸送が日に日に細くなつてきて、国民経済の維持が絶望の度を加えるようになって、日本陸軍が国内を支配して

いる時に「無条件降伏」と云うのでは、誰が首相になっても二の足を踏むことになります。

第二の問題点は、昭和十一年の二・二六事件の亡霊とも云うべきものです。連合国側の発表を見ると、無条件降伏が日本の軍国主義絶滅を目標にしていることは明らかでした。それだけに陸軍には受け入れ難いものであり、受け入れればまた反乱が起こり、血を見ることにならないかと恐れたのです。それに東条時代、政治活動に対する憲兵の監視の目は厳しいものでした。もし、終戦を考えている人たちが一網打尽にでもなれば、戦争継続一本槍の連中ががちり政権を握り、終戦の機会を永久に断ってしまうことにならないか。内大臣木戸幸一の心配もこの点にあり、終戦を表立って口にすることはまだまだタブーだったのです。

最近、重光家で発見された資料が、この木戸の心配を裏付けています。重光が最高戦争指導会議の協議を走り書きした記録、手記ですが、「内府談」、つまり重光が木戸から聞いた話として注目すべき記述があります。九月二十六日のことですが、天皇が「ドイツが負けたら、その機会に国家の名誉を維持したまま、武装解除や戦争責任問題を回避して戦争終結に持ち込むことは出来ないか。領土はどうでもよい」と発言されているのです。木戸が慌てて「誰にもお話になつてはいけません。もし洩れれば大変なことになる」と注意し、「自分からよく外相だけに云っておきます」と「内府談」となったわけですが、天皇がドイツ降伏を機会に、国体護持を条件にした平和回復、その場合領土問題などは二の次と考えていたことがわかります。同時にこの木戸発言は、たとえ天皇であつても、和平を考えたら軍部がどんな行動に出るか、木戸が不安を感じていたことを物語っています。

第三の問題は、陸海軍大臣は現役の大將、中將に限ると云う「軍部大臣現役武官制」の規定です。軍部権力の抹殺を目標にした「無条件降伏」、内閣がそれをやるうとすれば、果たして軍部が大臣を出してくるかどうか。とにかく陸海軍大臣がいけないことには、内閣は作れないのです。この三点は、東条内閣が総辞職した時から木戸をはじめ重臣たちが頭に抱いていた難問であり、後継内閣が終戦ではなく、とりあえずは戦争継続を前提とした内閣になつていったわけです。

後継首相を選ぶ重臣会議は、七月十八日午後四時から宮中で開かれました。木戸のほか首相経験者七人と枢密院議長の前原嘉道が出席し、大勢は戦時内閣だから軍人でなければいけない、それも何百万もの大軍を内外に動かしている陸軍から出すほかはない。そして「東条陸軍」を抑えられる人物、それには士官学校十七期の東条より先輩を選ぼうとなつたのです。現役の陸軍大將だけでも二十二人もいます。武官名簿まで持ち出して先任順に、第一に十一期の南方軍總司令官寺内寿一元帥、次に十二期の支那派遣軍總司令官畑俊六元帥、そして三番手としてやはり十二期、予備役になつている朝鮮總督の小磯と、三人の候補が決まりました。

木戸が、この重臣会議の結論を天皇に伝えたのが午後八時五十分です。總司令

官として前線で指揮をとっている寺内や畑を呼び戻すには、作戦に支障がないかどうか、参謀総長の意見を聞く必要があります。東条はこの日、参謀総長を関東軍司令官の梅津美治郎大将と交代し、その親補式に出席するため参内していましたが、この段階ではまだ参謀総長の現職です。東条は、その総長権限を使って第一候補の寺内を潰したのです。「第一線司令官を一日でも空けるのは不可能であり、また内地の政治情勢を前線に影響させると士気を落とすことになる」。これが理由でしたが、自分を総辞職に追い込んだ長州閥、木戸と国務大臣の辞表提出を拒否した岸信介。この二人に連なる寺内を、何としても総理にするわけにはいかない。この東条の執念だったと云う見方があります。寺内がダメだという条件は、畑にも当てはまりません。こうして残ったのが、予備役で、朝鮮総督は軍の職分ではありませんから、東条の了解を必要としない三番手の小磯となったのです。

枢密院議長の原はこのあと八月七日に急死しますが、「この内閣により国の運命が決まるという時だ。軍人の一人に全責任を負えというのは無理だ。真に威望ある人の挙国一致内閣たるを要す。ついては、五人ぐらい協同してお引き受けることにしてはどうか。『卿等協力して内閣を組織せよ』との仰せあるがよからう」と主張していました。明治二十五年、第一次松方正義内閣が選挙大干渉を糾弾されて倒れた時、第二次伊藤博文内閣は六人の元勲総出で危機突破を図りましたが、この「元勲内閣」の故知にならえと云うのです。近衛も小磯の政治力に不安を感じていました。原の提案を思い出し、「米内の海軍での信望は圧倒的だから、この二人の連立内閣にしたらどうか」。こう考えて翌日、元首相の米内光政を口説いたのです。米内を入れることで終戦内閣に近づきたい、また陸海軍の対立を二人に調整させる狙いもありました。米内は「海軍大臣としてはおこがましいが、自分が最適任だ」と云って引き受けたそうです。米内自身、心中密かに現役に復帰して海相になることで海軍部内を抑え、戦争終結にもっていくことを決意していたのです。

近衛が他の重臣にも根回しした上で、木戸に「小磯・米内連立内閣」を提案すると、小磯を推薦する羽目になった木戸も賛成です。小磯は満州事変の前後に軍務局長、次官をやり、予備役になってからは平沼、米内内閣で拓務大臣として閣僚経験もありました。しかし、木戸に云わせると「小磯には何にもすっかりした判断はなかった。あの人は若いとき、満州や蒙古の方でいろんな謀略をやるのに魅力を感じる風のタイプの男だね。こちよこちよした謀略的な：陸軍の軍務局にはそういうのがちよいちよいたね、謀略で何かやってやろうというのがね。それはちよっと成功しても結局だめなんだね」。こう云って、小磯を余り評価していませんでした。

こうして二十日、小磯と米内は同時に参内して「卿等協力して内閣を組織すべ

し。特に大東亜戦争の目的完遂に努むべし。尚ソヴィエトロシアを刺激せざるやう着意するを要す」と、異例な大命降下となつたのです。勅語には原枢密院議長の言葉がそのまま使われましたが、云うならば名目は小磯内閣でも実質は米内内閣。和平への可能性を探りたいと云う、重臣たちの暗黙の期待がこめられた内閣でした。しかし、その期待は実現されませんでした。岡田啓介は「東条以外の者が出てくれば、自ずから戦争に対する批判も生まれてくるだろうと思つていたが、小磯は有頂天になつただけだった」と云つています。朝鮮から呼び出しを受けた小磯が大命降下を予想して参内すると、米内がいます。「僕もお召しを受けただよ」と云うので、「おかしなこともあるものだ」と不思議に思つたと云います。しかも自分が首相なのに、「卿等協力して」と梃をはめられたことが、自分に介添え役、支え棒をつけたと、かえつて小磯の自尊心を傷つけたようです。総理としての職責に関することについて、副総理格の米内には一切相談しようとはしなかつたのです。一方の米内も「自分の職責は自分の努力で遂行するが、他人の職責の範囲には一切干渉しない」、この海軍教育を実践してきた典型的な軍人です。終戦へのイニシアティブをとるのは総理と外相の職責であり、小磯に干渉がましいことは厳に慎むという態度で終始しました。ですから米内の終戦への決意は、小磯内閣では表面に出ることはなく、水面下でまず海軍部内を纏めるという形で進められていくことになるのです。こうして「陸海軍組合せの連立内閣」は、協力の狙いとは裏腹に意思統一もないままスタートすることになります。

原枢密院議長が小磯に「これからどうしてやつて行くのかね」と尋ねると、「ともかく、組閣出来たら死力を尽くしてやるだけです」と精神論の答えです。「死ぬばかりじゃ役に立たないね。時局は面倒なんだから、余程しつかりやつて貰わねばならないね」と暗示をかけたましたが、小磯にはそれが「終戦を急げ」という意味だとはわかりません。小磯自身「朝鮮にいて、大して負けているとは知らなかつた。サイパンが陥落して、どうもおかしい、負けているとは思つたが……」。この程度の戦局認識なのです。A級戦犯として無期禁固の判決を受けた小磯には獄中で書いた回顧録「葛山鴻爪」があります。東京裁判の判事ただ一人、日本戦犯の無罪を唱えたインドのパール判事の、その無罪意見書の裏に鉛筆で克明に綴つたものですが、「最後の一戦に勝利を獲られる望がないとも断言は出来ぬ。仮令、撃滅は出来ずとも、一時的撃破位は可能かも知れぬ。そこで和戦を決しても晩くはあるまい」。これが小磯の考えでした。敵に大打撃を与えて、華々しい戦果を背景に「名誉ある終戦」、あるいは「対等の交渉による終戦」を図る。それが出来るものなら、誰だつて望みますが、もうそのような可能性がなくなつていくことを、小磯は見通せなかつたのです。

戦時内閣と云うのは、軍事と政治の両輪が回転して初めて機能を發揮出来るものです。ですから小磯内閣組閣の焦点は、当然誰が陸相になるか、陸相人事でし

た。陸相を兼務していた東条でさえ、軍の作戦に介入することはおろか、作戦内容さえ知らされないことがあり、効率的な戦争指導には統帥権を握るしかないと参謀総長まで兼務する異例な人事を強行していました。ところが東条は、そうした難しさを小磯に伝えるどころか、臆面もなく自分が陸相に留まって引き続き陸軍を握ろうとしたのです。憲兵を指揮して反東条勢力を弾圧し、首相への返り咲きを狙ったのでしよう。東条を批判したために一兵卒として召集されたり、戦地に送られたりした者は七十二人も数えたと云われます。

新陸相選考の三長官会議は二十一日開かれましたが、教育総監の杉山元帥は陸相、参謀総長時代から「便所のドア」、定見がなく押された方になびくと陰口された人です。ですから陸相人事は、参謀総長になつた梅津の意向如何にかかつていたわけですが、東条は前夜のうちに腹心の富永恭次次官を梅津の所にやって、事前工作をしていました。「陸軍部内の動揺を抑えるため、陸相は依然東条大将に留任願うのが適当と思う」と云うのです。しかし梅津の方も、もう東条では持たないと、朝方、杉山と東条の留任阻止を打ち合わせていました。会議で富永が「東条大将でどうか」と口火を切ると、梅津は東条に向かつて「人心一新を求めてやまぬ国内の動向から見ると、東条大将は勇退してもらうのが適当と思う。陸相には杉山元帥になつて頂くよりほかはない」と宣告したのです。小磯と士官学校同期の杉山陸相が決まり、東条の野望が砕かれた瞬間でしたが、東条はその場で予備役編入を願ひ出て翌日発令されました。細川護貞さんは日記に「推測せらるゝものは、一つはヤケツパチ、二は現地へ派遣せらるゝを恐れてなり」と書いています。自分がやったのと同様、「死の戦地」に飛ばされるのを恐れたと云うのです。

しかし、陸軍出身の小磯に対する陸軍の態度は冷たいものでした。小磯は回顧録に「軍需省が出来て、陸相の権限は縮小したと考え、陸相兼任を申し出なかつた」。そして「戦争指導の実務に携わつてみた結果、やはり陸相兼任を敢行しなかつたことは、自らの熟慮が足りなかつたことを発見した」と後悔しています。『大本営機密日誌』によると、梅津に「現役復帰、陸相兼任」を申し出て断られたのが真相のようです。小磯は断られると、陸相に山下奉文大将か阿南惟幾大将の何れかを希望し、三つの条件を出しています。第一に、大本営令を改正して総理をその構成員にする。第二に、それがダメなら今回の戦争に限って総理を大本営の構成員にする。第三が、それも認められないなら、総理が戦争指導に強力に関与し得るような臨時機構を作れ。こう云うものですが、陸軍の回答は二十一日午後富永次官が持ってきました。

第一、新内閣が戦争を継続するならば、陸軍は協力を惜しまない。第二、海軍がどうであろうと、これは米内の現役復帰、海相就任を指しているのですが、陸軍は小磯の現役復帰、陸相兼任に不同意。陸相には杉山元帥を推薦する。第三、

首相やその他閣僚を大本営に加えることは不同意。政治と統帥の調和は、現在の大本営政府連絡会議で十分出来る。これでは「協力を惜しまない」と最初に謳いながら、提案は全て拒否。さすがに気が引けたのか、わずかに譲歩を見せたのが、連絡会議について「要望に応じ得るよう善処する用意がある」としたことです。こうして八月五日、支那事変以来の戦争指導機関だった大本営政府連絡会議が廃止され、政略と統帥の一元化を図るとして最高戦争指導会議を設置したのです。しかし実質的には、構成員も運営方法も従来の連絡会議と何ら変わらず、ただ名称を変えただけ。「大本営機密日誌」は「最高戦争指導会議に筋金入らず」と書いていますが、統帥部から正確な戦況が伝えられることはほとんどありませんでした。

実は小磯内閣が成立した七月二十一日付で、「今後ノ国政運営ニ対スル陸軍トシテノ対策」と題する起草者不明の文書が残っているのです。東条一派が書いたものに違いないのですが、「内閣ノ性格ヲ戦争完遂ノ一点ニ帰一セシメ」ることを目標に、陸軍が「大キク現内閣ヲ指導スルノ心構ヲ要ス」。さらに「早期政変アル場合ヲ予想」し、つまり東条復権を予想して、各方面への政治工作を行なうとしています。具体的には、内閣に現役軍人を参事官として入れて政治幕僚とし、内閣の監視・指導・連絡に当たらせる。重臣に対しては憲兵による監視は抑制し、その和平活動だけを監視する。一般国政については、速やかに臨時議會を開いて国民の戦意昂揚を図り、機会を狙って戒厳令を断行する。天皇も国民も眼中にない、陸軍独裁を狙う野望が露骨なものでした。

陸軍軍務局長の佐藤賢了は七月二十九日の翼賛壮年団全国支部長会議で、小磯内閣に対する反感もあらわに演説しています。「今度の政変は全く一部の者の謀略に基づいたものである。どうか諸君も今後依然東条内閣当時と同じ気持ちで、地方において翼壯の仕事に精進して頂きたい。一体、今度の内閣は二か月を出ずして倒壊すると思っている」。東条内閣は倒れてもその人脈は健在で、陸軍部内に何かと後遺症を引きずっていたのです。しかしそれも、八月に入ると東条の威光は急速に衰え、腹心たちも長くは中央に留まれません。まず富永次官が八月末、佐藤も十二月に転出し、東京憲兵隊長として弾圧の先頭に立ってきた四方諒二大佐も十一月末、上海憲兵隊長に格下げの形で追われました。首相秘書官の赤松貞雄大佐は陸軍省軍務課長に横滑りして二十年二月まで残りましたが、小磯から「ほほう、あそこにまだ東条の残党が残っているな」とからかわれ、憤慨したと云っています。「細川日記」には「東条首相に対しては『生かしておけぬ』との意味の投書しきりに来る由。軍はやはり東条色次第に薄らぎつゝあるも、国内和平派に対し、是等癡的存在を一掃するとの申し入れを警視庁に對し為し来たり」とあります。終戦を表立っては、とても口に出るなかつたわけです。

小磯内閣が八月四日の閣議で決定したスローガンは「国民総武装」です。「一億一丸となって戦闘態勢を確立せよ」と云うのですが、武装しようにもあるのは竹

槍ぐらい。大日本婦人会の、家庭の主婦を動員しての本格的な竹槍訓練が始まりました。空襲から身を守る必需品と云えば、防空頭巾とヘルメットですが、鉄不足から竹製のヘルメットまで現われました。古川ロッパは日記に書いています。「ならんでるならんでる黙々としてならんでる雑炊食堂の前に男・女・子どもならんでるあり得ない！この行列の中に一人でもきげんのいい人間がいるということとは戦争はここまで来たならんでるならんでる」。実に鋭い観察ですが、本当に戦局はここまで来ていたのです。

米内の終戦への決意は、海軍次官に海兵校長の井上成美中将を起用することから始まりました。かつて米内が日独伊三国同盟に反対した海相時代、次官の山本五十六、連合艦隊司令長官として戦死した山本と共に、軍務局長として海軍部内を纏めたのは井上です。終戦には、井上以外の次官は考えられなかったのでしょうか。七月二十八日の夜、京都の都ホテルに井上を呼び出し、「おい、やってくれよ」と米内流の切り出し方をしたのです。井上はなかなか「うん」と云いません。最後は「君の政治嫌いは百も承知している。政治の話になったら、天井を向いていればいいよ」と云って承知させました。しかし次官ともなれば、政治と関連しない問題は何一つありません。朝、軍令部作戦室で戦況報告を聞き、作戦電報の綴じ込みを見、国内の実情を知るにつけても、「もはや勝算は全くない。一日戦さを続けければ、それだけ人命、資材、国富を失うばかりでなく、和平の条件もますます悪くなる」。こう考えた井上は、米内の許可をとると八月二十九日、教育局長の高木惣吉少将に終戦工作の研究を命じたのです。井上は「このことは大臣と総長、軍令部総長は鳴田繁太郎から及川古志郎に代わっていました、私の他は誰も知っていない。部内に洩れてはまずいから、君は病氣休養という名目を出仕になって貰う」と云います。

高木は療養と称して、戦後外相をした藤山愛一郎の熱海の別荘で密かに終戦構想を練りました。結論はこうでした。もはや名論卓説の時期は過ぎ、何よりも行動を迫られている。しかし、陸軍は「本土決戦、あくまで戦争完遂」を叫び、海軍にも徹底抗戦論者が多く、国内どこにも戦争打切りの基盤は出来ていない。連合国も勝ち戦に乗っていて、日本に都合のいい条件で講和を承知するはずもない。高木は日米開戦に反対した山本五十六が開戦前に鳴田海相に宛てた手紙、「畏れ多き事ながら、ただ残されたるは尊き聖断の一途のみと恐懼する次第に御座候」を思い出したと云います。幸い海軍は待望の米内・井上コンビであり、まず各方面の流れを海軍に集めて、最後は陛下に決断してもらおう以外に陸軍を抑える切札はない。こう判断したのです。高木は、目立たず連絡にも便利な場所ということ、目黒の海軍大学校の一室を借り、副官役として補佐官を一人つけて貰いました。終戦工作は、重臣をはじめ頼りになり、秘密を守る人の歴訪から始まり、並行して日本に課せられる要求、賠償問題や天皇制を連合国がどう考

えているかの研究、世論の動向調査もしました。高木は「終戦工作で最大の難事は、革命の危険を冒さないうで陸軍を説得することだった」と云っています。

興味深いのは、重光外相も高木と同じ考えだったことです。重光は、外務省が「日本外交の過誤」を纏めた際の事情聴取で、こう語っています。「大臣に就任して自分がやるべきことと考えたのは、対支新政策の推進と終戦ということであった。ところが終戦については、四六時中憲兵の監視を受けているし、又外務省内にもスパイみたいなものを抱えこんでいた状況だったから、事を進めるのに実に苦心した。自分が本当に腹を打ち明けることが出来たのは、内大臣と陛下だけである。結局木戸内大臣と、宮中は内大臣、外は自分が受けもって事を進めて行くことに相談し、最後は鶴の一声で行くより外はないと肚を決めていた。その時期はドイツ崩壊ということにしていた」。私たちが戦後の今思うのは、沖縄が戦場になる前、せめて広島、長崎に原爆が投下される前、ソ連が参戦する前に、どうして終戦出来なかつたのか。小磯内閣の八か月半は余りにも犠牲の大きい空白期間だったと云う感じがしますが、高木や重光の話からすると、混乱なく終戦へ持っていくには、あるいは止むを得ない中間内閣だったのかも知れません。

ところで、八月以降に予想される米軍の進攻に対して大本営が立てた迎撃計画は「捷号作戦」、勝利への願いを作戦名に込めたもので、七月二十四日上奏裁可されました。米軍来攻に対し「陸海空の戦力を極度に集中して敵空母、輸送船を必殺し、敵上陸せばこれを地上に必滅す」。あの頃の文書を見ますと、とにかく「必殺」とか「必滅」と云った大げさな表現で埋まっていますが、決戦が予想される作戦区域を、南から「捷一号比島方面」、「捷二号九州南部、南西諸島及び台湾」、「捷三号本州、四国、九州」、「捷四号北海道方面」と設定しました。比島を一号としたのはまずフィリピン来攻が予想されたからです。「戦力を極度に集中し」としながら、実際は本土防衛をにらんで極力航空兵力の温存を図る。軍事的努力としては決戦七、長期戦三ぐらいの割合で決戦を挑もうと云うものでした。サイパンを失い、マリアナ沖海戦で空母三隻が沈没、基地航空部隊が壊滅的な打撃を受けた直後です。効果的な本土防衛態勢を築くためには、可能な限り敵に打撃を与え時間を稼がなければならなかったのです。しかし、全力を挙げても勝ち目の少ない米軍に対し「七割決戦案」と云うのは、日本の国力、戦力の実情を物語るものであり、決戦がそのまま消耗戦に引きずり込まれていく宿命にあったように思います。

こうして八月十九日、天皇も出席された最高戦争指導会議で「今後採るべき戦争指導の大綱」を決定したのです。その内容は、要するに「捷号作戦によって敵を撃破し、あくまで戦争の完遂を期す。同時に徹底した対外施策により世界戦政局の好転を期す」。小磯の話だと、どこで決戦をやるのか知りたいと思つて、会議で作戦用兵事項に再三口を出したんだそうです。ところが統帥部はこれを嫌い、

最後は秦彦三郎参謀次長が「近代的作戰用兵を知らぬ首相が、作戰用兵に容喙するのは遠慮して頂きたい」と言い出す始末です。小磯は「不正規支那軍を相手に六、七年も原則はずれの作戰を続け、軍隊の素質も、恐らく日露戦争当時の陸軍の面影すらあるかどうか疑わしい今日、近代的用兵などと呼ぶのを聞いて、むしろおかしくもあった」。統帥部の壁の厚さを憤慨していますが、それでも第一の戦場判断はフィリピンであることを引き出しました。

小磯は云っています。「決戦が幸い勝利しても、休戦和平にはいる準備態勢が整っておらねば、九仞の功を一簣に欠くことになる」。そこで作戰に呼応して「ソ連に対しては中立関係を維持し、更に国交の好転を図る。尚速かに独ソ間の和平実現に努む。重慶に対しては速かに統制ある政治工作を發動し、中国問題の解決を図る。之が為、極力ソ連の利用に努む」。こう云う対ソ、対重慶外交強化の外交方針が決まったのですが、重光は東条内閣時代から独ソ和平斡旋を提案していました。小磯内閣外相に留任したのも、対ソ外交で終戦のきっかけを掴みたいと考えていた木戸内大臣のの強い後押しだったと云われ、大命の勅語に「ソヴィエツトロシアを刺激せざるやう着意するを要す」の言葉が入られたのも、木戸の意向だったのでしょうか。

しかし、それはもう客観的にとても無理な情勢だったのです。ヒットラーの最終目的は、初めからソ連壊滅であり、独裁者ヒットラーが生きている限りは変わるはずがありません。ソ連にしても、敗走を重ねている時だったらまだ可能性があったかも知れませんが、ちょうど日米開戦の時にドイツ軍の進撃を食い止め、反撃に転じていました。強大な軍事力の米英と手を結び、日本の敗戦は確実になっています。日本がいくら譲歩を示しても、黙っていても何倍もの分け前が手に入ると云うのに、それを崩すようなことをするわけありません。ソ連はすでにテヘラン会談で、ドイツ崩壊後の対日参戦を約束し、その代償として南樺太と千島列島領有を要求していたのです。ソ連と云う国が、力を信奉し、冷酷に利益を追求する現実主義に徹した国なんだ。日本外交に、この理解が足りなかった証拠です。結局はこの幻想が、敗戦時にソ連に調停を求める甘い期待につながってしまうのです。

果たしてドイツは九月十四日、スターマー大使を通じての提案に「対ソ和平の意思がない」と回答してきました。ソ連に対しても、元首相の広田弘毅を特使として派遣することに決定し、独ソ和平の斡旋だけではなく日ソ中立条約の維持を図ろうとしたのですが、ソ連もまた十八日、「特使派遣」を拒否してきました。それどころか、スターリンは十一月七日の革命記念日に日本を「侵略国だ」と非難演説したのです。真珠湾攻撃も、香港、シンガポール攻撃も「侵略国日本が戦争に対して完全な準備を整えていた証拠だ」と云うのですが、中立条約の維持さえ難しくなってきた大変なシヨックです。最高戦争指導会議は、刺激しないよう無言

の抗議、沈黙で通すことにしました。重慶工作も南京に汪兆銘政権がある以上、その政府を通して進めるのが筋だとなりましたが、自分の政権が潰れるかも知れない交渉に真面目に取り組むはずありません。しかも汪兆銘が十一が十日に名古屋で病死し、さっぱり進みません。

こうして小磯の考えた外交準備が整わないうちに、十月二十日米軍がフィリピン中東部のレイテ島に上陸、小磯首相が「レイテ戦こそ今次大戦の天王山」と叫ぶレイテ決戦が始まることになるのです。

×

×

大本営は「捷一号作戦」のためフィリピンの防備強化を急ぎましたが、中心はあくまでルソン島でした。南方資源地帯と本土を結ぶ日本の生命線だからです。第十四軍を第十四方面軍に昇格させ、その下に第三十五軍を新設してミンダナオ、レイテなどフィリピン中南部を担当させました。九月二十六日には方面軍司令官にシンガポールを攻略した山下奉文大将を任命し、「地上決戦はルソン地区にこれを求む」。フィリピンには島が二千もあって、少ない兵力を分散配置するよりルソンに集中させた方が効率的です。強力な敵機動部隊を考えれば、増援部隊の海上輸送も難しくなり。そこで米軍が攻めてきても、中南部の場合には空と海だけで決戦を行い、「陸上決戦場はルソン島に限定する」。こう云う作戦計画を指示したのです。

海軍の方は、マリアナ諸島に千六百機を展開させていた基地航空部隊、第一航空艦隊がサイパン攻防戦で壊滅的な打撃を受けていました。司令部をミンダナオ島のダバオに移し、九月初めには何とか五百機にまで整備しましたが、九日から始まった空襲でまたも大きな痛手を受けてしまったのです。哨戒機の不足、レーダー警戒の不備から全くの奇襲攻撃になった結果でしたが、被害を大きくしたのがダバオ海軍見張所の誤報事件です。十日午前四時、見張員が「敵上陸用舟艇発見」と報告してきました。慌ててミンダナオ島の全戦闘機を一つ北のセブ島に退避させましたが、敵は一兵もやって来ません。前日の空襲で神経を尖らせていた見張員が、水平線にきらめく波を上陸用舟艇と錯覚したのです。富士川の源平の戦いで水鳥の羽音に驚いて逃げ出した平家と同じようなものですが、セブ島の小さな基地に戦闘機が百機も集中する超過密現象が起きてしまいました。そこを狙って波状攻撃が繰り返され、第一航空艦隊の実働機数は百八十八機に減ってしまっただけです。

九月二十一日にはマニラが空襲され、大本営は「いよいよ来る」と云うので、決戦方面を「捷一号」の比島としました。連合艦隊も二十九日、作戦指揮効率化のため司令部を旗艦の軽巡大淀から日吉台の慶応大学構内に移しましたが、「指揮官陣頭」を伝統として常に旗艦で指揮をとっていた連合艦隊司令長官が、陸に上がったのは日本海軍始まって以来のことでした。実は米軍は重大な作戦変更をして

いたのです。ダバオ空襲の際、レイテ島で撃墜されたパイロットが原住民から、レイテの日本軍防備が極めて薄いことを聞き出していました。報告を受けた第三艦隊司令長官のハルゼーは、空襲を迎撃する日本機が少なかつたことから、「敵の準備は不足している。時間を与えずに食い付くべきだ」と考えて「ミンダナオ攻略は中止し、直接レイテに進むべきだ」と打電、アメリカ統合参謀本部も九月十五日、年末の予定だったレイテ上陸作戦を繰り上げ、十月二十日実施と決定したのです。

それに先立つ米軍の沖縄、台湾空襲は、十月十日から始まりました。連合艦隊も台湾東方海上に大機動部隊を発見し、十二日から十六日にかけて台湾沖航空戦が展開されたのです。中心は「I攻撃部隊」と名付けた約百五十機。全海軍から選抜の精鋭飛行隊と陸軍爆撃隊で編成したもので、「海軍航空の神様」と云われた軍令部参謀の源田實中佐、航空自衛隊幕僚長や参議院議員をした源田考案の特殊攻撃部隊です。その頃の日本機には、もうアメリカ機動部隊の防空網を正面から突破する力はありません。開戦当初、平均五百時間だったパイロットの飛行時間は多い者でもせいぜい百五十時間。そこで比島沖に発生しやすい台風の力を借り、悪天候で敵が戦闘機を飛ばせにくい夜間、または薄暮に魚雷攻撃をかけようと云うのです。台風のTyhon、または魚雷のTorpedoから命名したと云われ、切札は各雷撃機につけたH六号レーダーでした。敵機動部隊を捉えた味方偵察機が電波で誘導、雷撃隊が殺到して夜間レーダー雷撃をする段取りです。

十二日の夕方は、台風が比島東方にあつて荒れ模様、絶好の攻撃日和でした。南九州の鹿屋基地や沖縄からI攻撃部隊百機が出撃し、次々と威勢のいい報告が入ってきました。大本営は十六日午後三時、軍艦マーチの鳴り物入りで「轟撃沈空母十隻、戦艦二隻、撃破空母三隻、戦艦一隻」と発表したのです。ラジオは繰り返し繰り返しこの発表を読み上げましたし、新聞社の掲示板も速報に黒山の人大かり。劇場や映画館では一時中断してラジオ放送が流され、観客は総立ちになって万歳三唱に沸き立ちました。しかも大本営は追いかけて十九日午後六時、「我部隊は連日連夜、台湾及びビルソン東方海面の敵機動部隊を猛攻し、その過半の兵力を壊滅して、これを壊走せしめたり」。そして総合戦果を「空母十一隻を含む十七隻を撃沈、空母八隻を含む二十八隻を大破、撃墜百十二機。我方の損害飛行機未帰還三百十二機」、「本戦闘を台湾沖航空戦と呼称す」と発表したのです。

国民にとつても久しぶりに聞く大勝利のニュースで、祝い酒の特別配給もありました。二十日には日比谷公会堂で「億億激米英撃碎国民大会」が開かれ、小磯首相は陸軍大将の軍装も凛凛しく塩辛声で演説しました。「国民待望の的であつた決戦の幕は、果然切つて落とされ、かくも見事な大戦果が獲得された。勝利は必ずわが頭上にある」。私もそうでしたが、国民はみんな、この戦争がもう勝利で終わるかのように喜んだのです。

ところが、これは幻の大戦果でした。実際は撃沈は一隻もなく、わずかに巡洋艦二隻が大破しただけだったのです。ハルゼーは日本の海外向け宣伝放送、「米機動部隊全滅」をあざ笑うように、太平洋艦隊司令長官のニミッツに打電しています。「東京放送が全滅と報じた第三艦隊は、全艦海中より引き揚げられ、敵に向かつて退却しつつあり」。何でこんなことになったのか。一つは、肝心の工攻撃部隊のレーダーが故障で二割前後しか働かず、何のことはない、闇夜に鉄砲を撃つと同じになってしまったのです。その上、パイロットはいくら精銳を集めていても、戦場経験のない者ばかり。月のない闇の海を、雷撃のため思いっきり高度を下げて全力で突進します。爆発が起ると、幻惑されて何も見えません。味方機の自爆炎上を敵艦撃沈と見誤ったり、敵艦の大砲発砲の炎を魚雷命中と誤認したのです。誤認に誤認報告が重なり、とてつもない誇大戦果に膨れ上がってしまいました。

それが愕然とすることになったのは十六日未明、索敵機のレーダーが敵機動部隊らしい三つの群れを探知、午前十時過ぎには「台湾東方海上で西に進む空母七隻、戦艦七隻発見」の報告が入ってきたのです。まさに青天の霹靂でした。戦果報告を再検討の結果、相当割り引きしなければならぬ、「米空母は確実に十隻は健在」との判断に達しました。ところが誇大戦果は訂正されず、参謀総長、軍令部総長は十八日参内して「台湾沖航空戦勝利」を上奏、十九日には「撃沈破四五隻」と戦果を拡大させ、「朕深く之を嘉賞す」と天皇の勅語まで出ています。

そして最大の問題は、この戦果判断の訂正を陸軍には全く知らせなかったことでした。参謀本部作戦部長の真田穰一郎少将は「戦後、米軍編纂の太平洋戦史を読んで初めて判った」と云っています。いくら陸海軍の仲が悪かったとはいえ、驚くべき秘密主義ですが、その背景にはタンカーと燃料の不足があったのです。「捷号作戦」が決まった時、海軍は陸軍に高速油槽船六隻の使用を申し入れていました。連合艦隊を出撃させるにはどうしても必要だったからですが、国内の燃料需給が逼迫している時です。陸海軍の話し合いでは「連合艦隊解体論」まで出ていたのです。陸軍側が「連合艦隊を解体して、使っているタンカーを全部、南方からの燃料輸送に当てたらどうか。今や敵撃滅に何の効用なき連合艦隊のために、月七万トンの重油を無駄遣いさせるのは何とも勿体ない。よろしく瀬戸内海に釘付けにすべきである」。こんな激論の中でやっと要求を認めさせた海軍としては、「あの大戦果は間違いでした」とは、とても陸軍に云えなかつたのでしよう。

しかし、その結果は重大だったのです。米軍のレイテ作戦は、日本中が大勝利に沸き立っていた十月十七日朝、レイテ湾入り口のスルアン島上陸から始まりました。大本営は「捷一号作戦発動」を発令しましたが、米軍は二十日朝、猛烈な艦砲射撃と共に七個師団二十万の大軍をレイテに上陸させてきたのです。護衛空母十八隻、戦艦六隻、総勢七百一隻の大艦隊です。本当は陸軍だつて、ここで「お

かしい」と思つて当然だったでしょう。ところが参謀本部は、「ルソン決戦」の方針を急遽、「レイテ地上決戦」に変更してしまつたのです。作戦課長の服部卓四郎大佐は「敵艦隊に決定的な打撃を与えたものと信じ、その直後にレイテに進攻してくることは、従来にない無理押し之作戦をしているものと判断した。レイテ海岸には、機動部隊の援護なき上陸船団と上陸部隊が密集している。今こそ、レイテに陸海空の決戦を求めべきだ」と云うのです。

第十四方面軍は「ルソン決戦」に備えて、決戦陣地を構築していました。軍司令官の山下は「何か月もかけて準備したルソン決戦を棄ててレイテに進出するなど無謀だ。第一、海上輸送の準備もない」。こう云つて反対しましたが、マニラに飛んだ服部は「一刻を争う。機を失せず、戦車、重火器、砲兵の精鋭部隊をレイテに投入すべきだ」と説得し、第一師団、第二十六師団のレイテ増援が決まりました。しかし、レイテを守る第十六師団一万九千の将兵は、初日から悲惨な戦闘にさらされていたのです。無数の駆逐艦とロケット砲搭載艦が数千発の砲弾、ロケット弾を撃ち込んできます。それは「バアンという大砲の音ではなく、ゴアアという連続音だった」と、生存者は回想しています。陣地は破壊され、電話線が寸断され、将兵の肉片、内臓が飛散しました。島の東側に配備していた部隊は戦鬪どころではなく、銃や弾丸、食糧を全部棄てて山に逃げ込むのがやっと。タクロバン飛行場はあつという間に占領され、兵士たちは頼るべき陣地もなく、ただ逃げ惑い、壊滅したのです。しかも暴風雨のため、米軍の上陸前から地上通信網が一切不通となり、道路も寸断されていました。師団司令部は全く状況不明に陥り、第三十五軍、方面軍の上級司令部も、第十六師団がすでに壊滅状態になつていることを知らないまま、レイテ決戦に突入するのです。

陸軍関係者は口を揃えて「台湾沖航空戦の真相を知っていたら、決してレイテ決戦には踏み切らなかつた」と断言しています。確かに海軍の罪は大変大きいのですが、第一決戦兵力である味方航空戦力の実情をどの程度把握していたのでしょうか。台湾沖航空戦と相次ぐ空襲で米軍がレイテに上陸してきた時、海軍機はフィリピンにわずかに三十五機、台湾、九州に二百三十機。陸軍の第四航空軍も残存機二百機、そのうちすぐ使える可動機は六、七十機に過ぎなかつたのです。制空権、制海権のないところに作戦が成り立たないことは、ガダルカナル、サイパン敗戦でいやと云うほど味わつたはずでした。しかし結局は的確な総合判断もせずに、味方に有利な情報だけに頼つてしまふのです。服部は、戦死、戦病死一万九千人、それもほとんどが餓死という悲惨なガダルカナル敗戦の時の作戦課長でした。そして今度は、レイテが七万余りの英霊が眠る戦場になるのです。

「捷一号作戦」により連合艦隊が立てた作戦計画は、水上艦艇の全滅を賭しても米軍のレイテ進攻を食い止め、日本の南方補給線を守り抜こうと云うものでした。本来なら海上決戦の主力となる第一機動艦隊は、マリアナ沖海戦で優秀な

パイロットを数多く失っていて、航空攻撃に当たる飛行隊を編成出来ません。そこでこれを囿の捨て駒にしてアメリカ機動部隊を北方に引き付け、そのすきに三つの艦隊がレイテの上陸地点に突入、敵輸送船団と差し違えようと云うのです。動員した艦艇は世界最強の戦艦大和、武蔵をはじめ戦艦九隻、空母四隻など七十七隻。連合艦隊の八割に相当し、航空機は本土防衛用に残してあった第二航空艦隊を比島に進出させ七百十六機。アメリカ側は上陸用艦船を含め九百隻近く、航空機は千二百八十機です。この日米海軍の大艦隊が十月二十三日から四昼夜にわたって、レイテを中心に東西六百カイリ、南北二百カイリ、日本全土の約一・四倍の広大な海域で比島沖海戦、アメリカ側ではレイテ沖海戦と呼んでいます。四「史上最大の海戦」を展開したのです。

航空総攻撃を二十四日、レイテ突入日は二十五日と定め、まず二十日、小沢治三郎中将率いる囿役の第一機動艦隊が豊後水道からルソン海峡に向かいました。突入部隊の方は、主力となる栗田健男中将の第二艦隊が二十二日朝ボルネオのブルネイ泊地を出撃、比島中央部の島々を縫って一旦太平洋へ出た後、北からレイテへ。これに呼応してブルネイを出た西村祥治中将の別働隊、台湾を出た志摩清英中将の第五艦隊が南からと、レイテ湾を挟み撃ちする計画です。ところが栗田艦隊は出撃翌日の二十三日、パラワン水道で潜水艦攻撃を受け、旗艦愛宕など二隻の重巡が沈没してしまつたのです。司令部を大和に移しましたが、なぜ旗艦を最初から通信設備と防衛力に優れた大和にしておかなかつたのか。夜明け前にレイテ突入の計画で、「指揮官陣頭」の伝統からも夜戦が得意で足回りのきく重巡の方がよいと、連合艦隊の意向だつたと云われます。しかし沈没の際、司令部通信要員の多くが他の駆逐艦に収容されてしまい、大和の通信員で補充したものの、艦隊旗艦としての通信に慣れていません。これが艦隊司令部の通信能力の低下につながりました。広汎な海域で、同時に四つの艦隊が協同行動をするのです。作戦の成否は完全なタイミングの一致にかかつていたのに、お互い状況不明のまま戦闘をすると云う、致命的な欠陥になつてしまつたのです。

航空総攻撃の二十四日、基地航空部隊は二百五十機を出撃させましたが、悪天候で敵機動部隊を発見して攻撃できたのは十一機だけ。爆弾が小型空母プリンストンに命中して、火災炎上でアメリカ側が雷撃処分したのが唯一の戦果でした。そしてこの航空総攻撃の失敗で、栗田艦隊はアメリカ機動部隊の集中攻撃を受けることになつたのです。日本海軍が誇る戦艦武蔵は実に魚雷二十本、爆弾十七発の命中弾で二十四日午後六時三十五分、シブヤン海に姿を消しました。空襲を避けようと退避行動をとつたため、栗田艦隊の行動予定に六時間の遅れが出て、レイテ突入は二十五日午前十一時に変更されました。西村艦隊の方は予定通り未明突入のため、二十五日午前一時半スリガオ海峡にさしかかりましたが、待ち伏せていたアメリカ艦隊のレーダー攻撃で駆逐艦一隻を残して壊滅したのです。乗員

千四百人前後の戦艦山城、扶桑で生き残ったのは共にわずか十人。午前四時過ぎにやって来た後続の志摩艦隊も、炎上する西村艦隊を見て、一撃しただけで戦場を離脱し、南方からの突入は失敗しました。

一方の栗田艦隊は、サンベルナルデイノ海峡を通過し、サマール島沿いに南下していましたが、二十五日午前六時四十五分、アメリカ空母部隊を発見したのです。栗田は戦艦戦隊、巡洋艦戦隊に突撃を命じ、大和も四十六号砲の砲撃を開始しました。護衛空母一隻、駆逐艦三隻を撃沈しましたが、煙幕とスコールに邪魔され追い切れません。敵機の攻撃で損害も出てきたため追撃を打ち切って、レイテへの進撃を再開したのが午前十一時二十分。ブルネイを出た時三十二隻だった艦隊は半分の十六隻に減っていましたが、そこへ入ってきたのが「敵機動部隊」の情報です。栗田は午後零時二十六分、レイテ湾を目前にして反転を命じ、連合艦隊司令部に打電させました。「レイテ泊地突入を止め、サマール東岸を北上し、敵機動部隊を求めて決戦す」。しかし栗田が決戦を求めた敵機動部隊は、実際は存在しなかったのです。栗田艦隊は敵を見つけられないまま、二十八日ブルネイに帰ってきました。

この間、囿役の小沢艦隊は「全滅覚悟で敵機動部隊を北方に誘い出す」と言う、悲劇的な役割を十分果たしていたのです。わざと無電を発信して敵に位置を知らせましたから、ハルゼーは「これぞ日本の主力部隊」と見て、第三十四機動部隊、高速戦艦部隊を急速北上させました。小沢艦隊は機動部隊と云っても、艦載機は敵機来襲前にフイリピンの陸上基地に向かわせていて、翼を持たない艦隊です。二十五日朝から始まった一方的な攻撃で瑞鶴など空母四隻が沈没しましたが、レイテ湾の海峡出口は空っぽになっていたのです。栗田艦隊のレイテ接近に慌てたのが、上陸部隊を守る第七艦隊のキンケイド中将です。護衛空母に旧式戦艦ではとても大和に太刀打ち出来ない、ハルゼーに応援要請したのですが、ハルゼーは「手負いの栗田艦隊など第七艦隊で十分」と無視です。グアム島で指揮をとっていたニミッツは、第七艦隊の重なる緊急要請電に午前十時、ハルゼーに打電させました。「第三十四機動部隊はいずこにありや」。しかも暗号係士官が「全世界は知らんと欲す」と余計な言葉を付け加えたものですから、ハルゼーは「こんな侮辱はない」と、帽子をデッキに叩きつけて怒ったそうです。やっと第三十四機動部隊に変針を命じて南下させましたが、この時レイテ湾では輸送船団六十隻が揚陸中で、その一隻にはマッカーサーが乗っていたと云われます。

作家の大岡昇平さんは「レイテ戦記」に、「栗田艦隊の反転は悔いを千載に残したというのが、われわれの心情的判断である」と書いています。負けは負けでも、せめてこの時大和がレイテ湾に突入していたらと、戦後も長く「謎の反転」として話題になりました。栗田はなぜ反転したのか。戦後の二十四年、GHQの歴史課に提出した陳述書の中で、栗田はこう書いています。「すでに予定時刻をは

るかに遅れてレイテ湾に突入することは、敵の対抗準備が出来たとところに徒に好餌、よい餌になる恐れがあった。むしろ予定を変更して、北方の敵機動部隊を攻撃した方がよいと思つた」。小沢艦隊の情報については、「その片鱗すらも私の耳に入らなかつた」。そして「大和の戦闘詳報によると、十二時過ぎと十四時過ぎに小沢艦隊の電報を受け取っているが、私はレイテ湾突入を中止した前後に、このような情報を聞いた記憶がない」と云うのです。通信不備の欠陥が、一番肝心な所で出てしまつたわけです。

しかし一番大きかつたのは、栗田艦隊が日本海軍伝統の「艦隊決戦思想」に取り憑かれていて、「輸送船団撃滅」と云う本来の作戦目的を軽視した結果なのではないでしょうか。八月十日にマニラで「捷一号作戦」の打ち合わせが行なわれた時、小柳富次参謀長は不満を表明しています。連合艦隊参謀の神重徳大佐に「この計画は敵主力の撃滅を捨て、敵輸送船団を作戦目的としている。我々はあくまで敵主力の撃滅を第一目標とすべきものと考えている。一体、連合艦隊司令部は、この突入作戦で水上部隊を潰してしまつても構わぬ決心か」。神は「フィリピンを取られてしまえば南方は遮断され、日本は干上がる。そうなつては、艦隊を持つていても宝の持ち腐れです。どうあつても、フィリピンを手離すわけにいかない。この一戦に連合艦隊をすり潰しても敢えて悔いがない。これが長官の決心です」と、連合艦隊司令長官豊田副武の強い決意であることを伝えました。ところが小柳は「栗田艦隊はご命令通り輸送船団を目指して突進する」と云いながら、「途中で敵主力部隊と対立し、二者どちらかを択ぶか迷うような場合は、輸送船団を捨てて敵主力の撃滅に専念するが、それで差し支えないか」と念を押したのです。神はどうして「あくまで輸送船団撃滅だ」と、作戦目的を徹底させなかつたのか。神自身、艦隊参謀として果敢な作戦をやり「神さん、神懸かり」と云われた闘魂の持ち主。心のどこかに「艦隊決戦思想」の亡霊が宿つていたのかも知れません。

栗田艦隊作戦参謀の大谷藤之助大佐は、「旧式戦艦や価値なき輸送船と引き替えに、最後のとつておきの精強な艦隊を潰すよりは、よしや全滅しても、最強の敵機動部隊に体当りして碎けた方が、どれだけ有意義か知れない。これこそ死花を咲かすというものだ。本望だ。これが、長官以下幕僚の心境だった」と云っています。しかし栗田艦隊が反転した時、「捷一号作戦」の海軍決戦は事実上終止符を打ちました。同時に比島沖海戦の敗北が決まり、輸送船団を撃滅出来なかつたことで、レイテ決戦もまた決戦の性格を失つていったのです。比島沖海戦で、日本側は武蔵以下戦艦三隻、空母四隻など二十八隻が沈没し、多くの艦艇が損害を受けました。米軍の沈没は小型空母一隻、護衛空母二隻に駆逐艦三隻だけ。連合艦隊はこれ以後、組織的な戦闘力を失い、日本本土と南方資源地帯を結ぶ補給線が断たれて、日本の敗北を決定づけることになりました。

比島沖海戦最大の敗因は、こちらが航空兵力の傘をかぶらずに、鉄の雨の中に

突っ込んでいった。この航空戦力の圧倒的な差でしたが、それが特攻隊による体当たり攻撃を生むことになるのです。アメリカの辞書に「KAMIKAZE、スーサイド・タクチック、自殺戦法」と紹介され、私たちも元寇の神風の連想から「神風特別攻撃隊」と云っていましたが、「特攻生みの親」と云われた第一航空艦隊司令長官の大西滝治郎中将が命名したのは、「しんぷう特別攻撃隊」です。実は大西自身は、最初は特攻作戦に反対でした。大西の五十四歳の生涯は、そのまま海軍航空隊の歴史だと云ってもいいでしょう。中尉の時に日本最初の水上機母艦若宮のパイロットとなり、霞が浦航空隊副長、佐世保航空隊飛行隊長、空母赤城副長を経て支那事変では第一連合航空隊司令官。山本五十六の信頼も厚く、山本が開戦劈頭ハワイ真珠湾攻撃を決意した時、真っ先に相談して作戦計画を立てるよう依頼したのも大西です。しかし大西は、この奇襲攻撃に「無謀だ」と最後まで反対したほど、慎重さと合理性を大切にする人でした。熱血漢で西郷隆盛に似た風貌から、「大西郷に科学をプラスしたような男」と云われたそうです。ですから、空母千代田艦長の城英一郎大佐がマリアナ沖海戦で大敗して、「もはや体当たり攻撃以外に勝算はない」と進言した時も、大西は「そんなむごいことが出来るものか、統帥の外道だ」と斥けています。城はこの比島沖海戦で千代田と運命を共にしますが、人一倍部下思いで知られていた大西が、どうして生還の道のない必死の攻撃法に、部下たちを投じることを決意したのでしょうか。

十月十七日に司令長官としてマニラに着任した大西を驚かせたのが、戦闘機が零戦たった三十機しかなかったことです。三十機は現実には、飛んでいるもの、待機しているもの、整備中の三つに分けられますから、十機の計算にしかありません。名前は司令長官といかめしくても、まあ中隊長のようなものです。大西はそれまで軍需省の航空兵器総局総務局長をしていて、航空機補充がもうこれ以上内地に望めないことは、誰よりもよく知っていました。十九日の夕方、第二百一航空隊を訪ねて、幹部にこう切り出したのです。「栗田艦隊のレイテ突入を成功させないと由々しきことになる。敵空母の飛行甲板を一週間ぐらい使えないようにする必要はある。そのためには零戦に二百五十キ爆弾を積んで体当りするほかないと思うが、どんなものだろうか」。

副長の玉井浅一中佐はとっさに「自発的にやるのと、組織の命令でやるのとでは違う」と思ったそうです。二〇一空には玉井が一年前、松山航空隊で育てた第九期飛行予科練習生二十三人が配属になっていました。「自分が打ち明ければ、何人かは自分に命をくれるかも知れない」。そう思って練習生を集めると、全員が賛成してくれます。この少年兵の命を託す指揮官は、帝国海軍の名誉と伝統にかけても海軍兵学校の出身者でなければならぬ。玉井が一航艦参謀の猪口力平大佐に相談すると、同じ意見でした。海兵七十期の関行男大尉を呼んで「攻撃隊の指揮官として貴様に白羽の矢を立てたんだが、どうか」と云うと、関はオー

ルバックにした長髪の頭を両手で支え、目をつぶったまま身動きもしませんでした。だが、やがて明瞭な口調で「是非、私にやらせて下さい」と云ったそうです。

大抵の本がこう書いていますが、戦史研究家の森史朗さんによると、関大尉の最初の反応は「一晩、考えさせて下さい」。玉井から「明日にも攻撃隊を発進させねばならない。時間の猶予はない」と云われ、無造作にたった一言「わかりました」と答えたと云うのです。森さんは関係者に会って話を聞いていますが、関は親しい報道班員にこう云っています。「わしは天皇陛下の御為とか、国の為とかで行くんじゃない。最愛のKAの為に行くんだ。もし日本が負ければ、KAがアメリカ兵にやられる。それをさせない為に行くんだ」。KAと云うのは海軍士官の間で使われている隠語、「かかあ」の頭文字からとった奥さんのことですが、二十三歳の関は新婚早々でした。わずか三か月暮らしただけの新妻満里子に遺書を残しています。「満里子殿 何もしてやる事も出来ず、散り行く事はお前に対して誠に済まぬと思つて居る。何も云わずとも、武人の妻の覚悟は十分出来て居る事と思ふ。御両親に孝養を専一と心掛け生活して行く様、色々思出をたどりながら出発前に記す」。いきなり「国のために死んでくれ」と云われて、私には森さんの書いた関大尉が本当のように思えます。このレイテ戦で特攻隊員として戦死した第十三期飛行予備学生の遺稿集「雲流るる果てに」には、「生きるのは良いものと気が付く二日前」、「体当たり さぞ痛かろうと 友は征き」とあります。

大西は二十日午前一時過ぎ「神風特別攻撃隊」の編成命令を出し、選ばれた二十四人は、本居宣長の「しきしまのやまと心を人とは」朝日ににほふ山さくら花」の歌から敷島隊、大和隊、朝日隊、山桜隊の四隊に分けられました。大西は全員を集めて訓示しています。「いま日本を救うのは、重臣でも大臣でもなければ、軍令部総長でも司令長官でもない。それは諸子のごとき純真にして、氣力に満ちた若い人々のみである。従つて自分は一億国民に代わつてお願いする。どうか成功を祈る」。大西の足がブルブル震えていたと云いますが、副官にこう云つていたそうです。「人の評価は棺を覆いてのち定まるといふ言葉があるが、多分俺の場合は、棺を覆いて定まらず、なお百年のちにも知己を得ないだろう」。

特攻隊は二十一日から出撃し、悪天候でほとんどが引き返した中で、セブ島の基地から発進した大和隊の久納好孚中尉だけが帰りませんでした。戦果は確認されていませんが、これが特攻第一号です。関大尉ら敷島隊の五機が空母群を発見したのは二十五日、全機低空で突っ込み、護衛空母一隻を撃沈、三隻を大破させました。昭和天皇はこれを聞かれて「そのようにまでせねばならなかったか、しかしよくやった」と云われたそうです。天皇もさぞ切ない気持ちだったのでしょうか。関ら五人に対する連合艦隊長官の感状は二十八日、「忠烈万世に燦たり」と全軍に布告されました。朝日新聞は「噫忠烈」の見出しで、「身を捨てて国を救う崇高極致の戦法。中外に比類なき攻撃隊」と書いています。関大尉らは半月後の

十一月十二日に二階級特進しましたが、それからの新聞紙面には特攻隊員を「神鷲」、その戦死には「悠久の大義に殉ず」と云う言葉が躍るようになりました。

敷島隊の攻撃成功に、最初は大編隊攻撃戦法を主張していた第二航空艦隊長官の福留繁中將も特攻を決意します。陸軍の第四航空軍も十一月十二日の万葉隊を皮切りに特攻作戦に踏み切り、日本の航空作戦は全面的に特攻戦術に転換することになったのです。二十年一月までに海軍が百六回、約四百四十機、陸軍が六十二回、約四百機の特攻隊が出撃し、「一億総特攻」の気運を生んでいくことになりました。もともと「もはや特攻しかない」と云った空気は、サイパンが陥落しマリアナ沖海戦に大敗した時、すでに出来ていたと云つてもいいでしょう。海軍が人間魚雷の「回天」を制式兵器として採用したのが八月一日です。九三式魚雷を一人で操作し、千五百五十キの爆弾ごと敵艦に体当たりさせる。「必死必中」の精神を兵器にしたもので、天下の形勢を一変させるといふ意味から「回天」と命名されましたが、海軍省には九月十三日海軍特攻部が設置されました。ベニヤ製のモーターボートに爆弾をつけて体当たりする「震洋」、海に潜つて爆弾をつけた棒の先で敵艦船を突き上げる「伏竜」、飛行機に吊して目標近くで切り離す人間ロケット「桜花」。まさに「人間兵器」としか言いようのない特攻兵器が作られていったのです。

これは特攻兵器ではありませんが、陸軍は十一月三日、千葉県一宮など太平洋岸四十二か所から、アメリカ本土に向けて「風船爆弾」の第一回発射を行なっています。「ふ号作戦」と呼ばれましたが、和紙を貼り合わせた直径十センチ、重量八十キほどの気球に爆弾、焼夷弾を吊り下げ、偏西風に乗せてアメリカ本土を爆撃しようとするのです。女子挺身隊や女学生を動員して作られ、二十年春までに約九千個飛ばしたと云われますが、まあ風任せ。行き先は風に聞いてくれと云うようなものですが、二十年元日付のアメリカ週刊誌「タイム」は、「十二月初め、日本から飛来した風船爆弾がモンタナ州に落ち、樵が発見した」と報じています。

軍令部次長になつていた大西が自決したのは、終戦の玉音放送があつた翌日、八月十六日の午前二時過ぎでした。腹を十文字に切り、駆け付けた軍医が手当てしようとする、手を振って拒み、「これでいいんだ。送り出した部下たちとの約束が果たせる」。大西は特攻隊員を送る時「俺も必ず後から行く」と言い続けていました。流血の中で絶命したと云います。「特攻隊の英霊に曰す」で始まる遺書には「善く戦ひたり、深謝す。最後の勝利を信じつゝ肉弾として散華せり。然れども其の信念は遂に達成し得ざるに至れり。吾死を以て旧部下の英霊と其の遺族に謝せんとす」。そして「次に一般青壮年に告ぐ」として、「我が死にして、輕拳は利敵行為なるを思ひ、聖旨に副ひ奉り、自重忍苦するの誠とならば幸なり。隱忍するとも日本人たるの矜持を失ふ勿れ。諸子は国の宝なり。平時に処し、猶ほ克く特攻精神を堅持し、日本民族の福祉と世界人類の平和の為、最善を尽くせよ」。辞世は「之でよし 百万年の 仮寝かな」でした。

レイテ決戦の頃、「いざこいニミッツ、マッカーサー。出てくりや地獄へ逆落とし」。こんな少々品のない歌が流行ったのを、ご記憶の方も多いと思います。しかし、そのマッカーサーはレイテ上陸作戦の始まった十月二十日午後二時、早くも勝利宣言をしていたのです。巡洋艦ナッシュビルの甲板上から、ゲリラの通信波長を使って放送しました。「私はマッカーサー大将である。フィリピン市民諸君、私は帰ってきた。全能の神の加護により、わが軍は米比両国民の血で聖められたフィリピンの土の上に、再び立っている」。日本軍に追われてフィリピンを去る時にした約束、「アイ・シャル・リターン」を果たしたわけです。

そして、制空権・制海権を奪われた中でのレイテ増援作戦は、悲惨を極めたのです。第二十六師団などは三百機に空襲をされ輸送船四隻が沈没、兵員一万はどうか上陸出来たものの、重火器、弾薬、食糧は全て水没してしまいました。裸で上陸したも同然です。どんなに士気旺盛な精強部隊でも、食べるものがなければ戦えません。戦場には敗残兵が彷徨い、夜になると飯盒だけを持った食糧泥棒が横行するようになったのです。「食糧さえあれば」と嘆く指揮官、将兵。ガダルカナルの繰り返しでした。梅津参謀総長は十一月十四日、天皇に上奏しています。「第二十六師団は食糧皆無、第一師団は二十一日分の食糧を携行してレイテに至り、今や十四日であるから残り七七日のみ。第二十六師団は機関銃をも携行出来ずに上陸し、従って食糧の如きは全く揚陸してなく、背囊内の携行食糧もすでに尽きようとしている」。

最初から「レイテ決戦」に反対だった山下軍司令官は十一月九日、南方軍に「決戦中止」の意見具申をしています。「レイテ作戦は今や中止の時機にきている。この上統行するも成功の見込みなく、かえってこれからのルソン作戦を困難にする」。こう云うのですが、小磯首相の方は陸軍大将とはいえず予備役の悲しさ、そんな悲観的な戦況は全く知りません。前日八日の最高戦争指導会議で、陸軍にレイテのため八万トンの船舶徴用を決定した時、「敵撃滅のためには、今日国力を云々する時ではない。この際思い切った戦争指導をして貰いたい」。統帥部にハツバをかけ、その決意を示さんと云わんばかりに、ラジオ放送で「レイテ戦こそ天王山」の談話を発表したのです。しかし、レイテ戦は天王山どころか、武田勝頼が一族と共に滅亡した天目山でした。陸軍が潜水艇に食糧を積んで輸送したり、大体陸軍が海上輸送のために自前の潜水艇を建造するあたり、陸海軍の仲の悪さを象徴するような話ですが、十一月二十六日夜には薫空挺隊八十人が輸送機四機でブラウエン飛行場に胴体着陸し、斬り込みを決行しました。火柱が天に沖するのが目撃されたと云いますが、とても大勢に影響を及ぼすようなものではありません。

大本営は十二月十九日、ついに「レイテ決戦放棄」の方針を決定したのです。十五日に米軍がルソン南のミンドロ島を占領し、ここに飛行場が出来ればレイテと

ルソンは完全に分離されてしまうからです。山下方面軍司令官は二十五日、第三十五軍に命令しました。「尚集団長は、その作戦地域内において自活自戦、永久に抗戦を継続し、国軍将来における反攻の支とうたるべし」。尚集団長は第三十五軍司令官のこと、支とうと云うワープロの漢字にもない難しい言葉を使っていますが、支えになれと云うことです。しかし「自活自戦」と云うのは、もう兵隊も食糧、弾薬も送れないから、自分たちだけで戦えと云う、云ってみれば縁切り命令なのです。レイテに投入された兵力は七万五千、そのうちレイテから脱出した者九百名、終戦までに捕虜になった者八百名、終戦後まで生き残った者は七百名に過ぎませんでした。

梅津参謀総長は二十七日、レイテ決戦中止を天皇に報告しましたが、小磯首相が知ったのは三十日になってからでした。拜謁のため参内すると、居合わせた杉山陸相が「統帥部はレイテの決戦を止めて、ルソン決戦に変更したぞ」と云います。びつくりする間もなく、天皇からも「知っているか」と聞かれ、「お前は天王山と云ったが、どうする」と尋ねられたのです。天王山がいつの間にか消滅してしまつたのでは、国民の士気にも影響する。後始末をどうするのかと云うわけです。小磯は続いて開かれた最高戦争指導会議で、「総理の知らない間に既定方針が変更されては、戦時任務を遂行出来ない」と、梅津参謀総長を厳しく責めました。ところが梅津の方は「比島全体が初めから決戦場なんだ」と、まるで小磯が勝手にレイテと云ったと云わんばかりです。小磯も仕方なく元日夜の年頭のラジオ放送で、「フィリピン全域が天王山」と言い換えざるを得なくなつたのです。

こうして戦争指導の混乱が続く中、米軍は息もつかせずにルソン島攻略を目指してきました。二十年一月六日からリンガエン湾の艦砲射撃が始まり、九日には二十万の大軍を上陸させてきたのです。しかし「ルソン決戦」に備えて整えた兵力、軍需品はみんなレイテに送り出されていました。その「レイテ決戦」に失敗すれば、ルソンにはもう米軍に対抗出来るだけの力はありません。地上部隊を援護すべき航空戦力もなく、「ルソン決戦」もまた泡と消えるのです。マリアナ基地を突進したB29の本土空襲も、連日激化の一途を辿っていました。「大本営機密日誌」はレイテ決戦放棄が決まつた時、「こうなつた以上、今後の戦争指導上、和戦の転機を何れに求むべきか、大本営として作戦の重点を何れに指向すべきか、は重大な問題となつて来た。ここに本土決戦思想が擡頭するに至つた」と書いています。そして「木戸日記」によると、天皇は一月六日、「重臣たちの意向を聞きたい」と洩らされ、二月七日から開戦以来初めての重臣上奏が、「寒中ご機嫌伺い」と云う名目で行なわれることになるのですが、このことは次に「鈴木貫太郎内閣成立 その日大和は沈んだ」と云うテーマでお話します。